

福祉のひろば 10

2017



特集

社会福祉労働を未来志向でとらえよう

トーク 過去に向き合わないものは、
現在も、そして未来にも、向き合えない
荒木昭夫さん



住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

総合社会福祉研究所 今後の企画予定

●第22回合宿研究会

日 程：2018年1月6日(土)午後1時開会～7日(日)12時終了

会 場：大阪市内（予定）

参加費：5,000円（予定）

●海外視察研修

視察先：スウェーデン・ウメオ

日 程：2018年2月10日(土)～15日(木)

費 用：20～30万円

●第3回陸前高田学校

日 程：2018年3月1日(木)～4日(日) 仙台市・陸前高田市ほか

概 要：仙台市の復興の課題 陸前高田市視察など

※日程など企画内容を変更する場合があります。

詳細は、本誌、総合社会福祉研究所ホームページでお知らせします

総合社会福祉研究所

TEL06-6779-4894

<http://www.sosyaken.jp/>

FAX06-6779-4895

E-mail:mail@sosyaken.jp

釜かまのおっちゃんたちの夏



盆に帰るふるさともいつしか失い、“釜”で暮らし続ける、生き続けているおっちゃんたち。そのおっちゃんたちといっしょに、盆を“釜”でほっと一息。今年でもう46回目を迎える夏祭り。釜をねりあるくパレードから、映画会、釜の写真展示、三角公園を中心に。包摂の街、釜ヶ崎にもいろいろな風が吹き始めています。

(写真・コメント 下野祇園)



淀川工科高校の吹奏楽部は、例年、全国大会で金賞をとり続けています。生徒たちは夏休み場行進曲から始まり、昭和の数々の曲目を演奏し、おっちゃんたちは、青春像と結びつけなが甲おろしで締めくくられます。舞台の前に出てきて声援を送りながら踊るおっちゃんも。夏の

たそがれコンサートの終盤に演奏される ふるさとの曲。そこでは、ひらがなで大きく歌詞が書かれたポスターを生徒が掲げて、「いっしょに歌いましょう」と。いつの間にか音信不通となった家族、さまざまな理由でここに来たおっちゃんたち。しかし、語ることはないのです。若者の演奏にじっと耳を傾けながら、いつしか、うっすらと頬をつたうものが……。夏の野外の仕事はきびしいのです。いつまで、ここで生き続けられるか。夏祭りでは、釜で生きた人の追悼もします。



【ひろばトーク】

過去に向き合わないものは、
現在も、そして未来にも、向き合えない

荒木 昭夫 6

福祉のひろば

2017年10月号

●特集● 社会福祉労働を未来志向でとらえよう

社会福祉を担う若者たちの生活が苦しくなっている！

高倉 弘士 10

福祉を学ぶ養成校の学生たちの実態

20

〈座談会〉素顔の福祉大学生

26

●トピックス●

夏の四方山話（武内一／神門やす子／黒田孝彦）

32

原爆投下から72年 終わらない戦争

36

◆平成28年度「介護労働実態調査」の結果をみる

黒田 孝彦 40

「津久井やまゆり園再生基本構想 検討結果報告書」について

松尾 悦行 44

釜ヶ崎のおっちゃんたちが、月12万7000円の生活保護より、

月3万円の仕事をを選ぶのはなぜか？

48

光りなき者とともに～恂臧・政亮 父子二代の記～

52

研究所◆理事会◆トピックス

54

●連載●

施設から子どもたちの未来をきりひろく

乳児院がこどもたちにとって

かけがえのない居場所であり続けることを願って 吉岡美佐穂 58

相談室の窓から

親の愛と社会の支援体制

青木 道忠 62

育つ風景

第49回全国保育団体合同研究会裏話

清水 玲子 64

「助けて！」って言ってもええねんで！

一人でつらい思いをしている子どもたちに、どう届けるか

徳丸ゆき子 66

全盲夫婦の出会いから 二人三脚のあゆみ 千田勝夫・絹枝 68

私たちの子育て（2）いろいろあった三人の保育園時代

映画案内

『ヒトラー暗殺、13分の誤算』

吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

大阪市の生活保護利用者「確認カード」と

ビッグデータ分析を曲解した吉村市長提案

生田 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

似顔絵における4つの種類とはなんじゃ？！

ラッキー植松 74

ホームレスから日本を見れば

ありむら潜 76

花咲け！男やもめ

川口モトコ 77

●表紙の絵●

神門やす子



みんなのポスト 56 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81 /

●グラビア● “釜”^{かま}のおっちゃんたちの夏

過去に向き合わないものは、 現在も、そして未来にも、 向き合えない

元京都高齢者協同組合理事長 ^{あらか}荒木 ^{あきお}昭夫さん

八月四日午後、立命館大学平和ミュージアムで開催されている戦争展に伺い、戦争展に紙芝居で参加されている荒木昭夫さんを訪ねました。

荒木さんの身体には、ペースメーカーが埋め込まれています。あるとき、「突然、あやつり人形の糸が切れたような感じで、フニヤフニヤになった」、と心臓に電気が届かなくなったときのように笑いながらお話ししてくださいました。

今回の紙芝居は、「やっちゃんのおかあさん三人」のタイトルで、昨年、公演されたものの続編です。

戦前、「満州」と呼ばれた中国東北部には桃源郷とうげんきやうがあるとわれ、日本軍が侵略して満州国をつくり、そこに多くの日本人が移り住みました。戦況がきびしくなるなかで、満州に移り住んだ日本人々の暮らしはきびしくなり、敗戦に近づくにつれて、中国の人々からの対応もきつくなります。やがて、引き揚げ、日本に戻ってくるのですが、それは並大抵なことではありませんでした。生きて帰るだけでも精一杯で、中国に子どもを置いて親だけが戻るケースもたくさんあり、中国の人々に育てられた日本の子どもたちは少なくありません。



あらかき あきお

86歳。元京都高齢者協同組合理事長。紙芝居脚本家。その他の主な紙芝居脚本作品『とんぼ とほとほ かばん かばかば』童心社ほか

日本に戻った親は、置いてきた子に心を残しながら、中国に残された子は親に会いたいと願いながら、日本人の血を引いていることでさまざまな差別を受けて過ごし、いつかは日本に行きたい、実の親に会いたい、と願っていました。そして、日本で再会を果たすのですが、すでにそれぞれの生活は、復縁に至らず。しかし、想いを共有する多くの方々が、子どもたちを支え続けました。

今回の紙芝居は、〈生みの親〉〈引き揚げの時に救ってくれた親〉、そして〈中国の育ての親〉。この三人の母親と、主人公・やっちゃんのお話を、神門やすこさんの絵の紙芝居として、荒木さんが作り上げられたものです。

荒木さんは、さまざまな病気と向き合いながらも、いま、紙芝居を通して、平和、原発、くらしを考える会の活動をされています。



特集

社会福祉労働を未来志向でとらえよう

社会福祉事業を維持発展させる理由は、社会福祉対象の存在と、その対象の権利としての社会福祉、いわゆる人としての生活を営む保障を社会として誠実に達成させることに他なりません。しかし、目的と手段が入れ替わると、それは市場化路線となります。事業が儲けのため、配当のためものと化し、福祉労働はそもそもの社会福祉対象の人権保障、人としての生活を営む保障のための労働ではなくなり、資本への従属と化してしまいます。

福祉労働や医療労働などの社会労働は、構造改革のなかで大きくゆがめられ、同時に経営基盤が市場化路線のなかで、国家がおこなう労働の評価（報酬として認める労働と認めない労働、あるいは、正当な労働評価を忘っている労働等）によって、その労働が人としての生活や健康に欠かせないことであっても、国家のさじ加減で現場の労働が構成されてしまいます。この基本的な国家の志向は憲法と乖離し、社会福祉労働や事業自身がこの志向に大きく影響を受け、福祉労働自身を貧困化へ導いていきます。

ところが、現場はそうはいきません。なぜなら、そこには人として生きたい、生きることが当たり前という当然の要求と権利が底流に流れているからです。この流れは自然に発生したのではなく、人類の歴史のなかで築き上げられてきた行為であり、思想です。この志向は、今の国家の志向とは対抗せざるを得ません。日々の福祉労働や実践は、この対抗のなかで一進一退のようにみえても、その営みは経験や知恵として積み重ねられていきます。同

